



児童教育実践についての研究助成

# 研究紹介ファイル 2016

vol.2

## 読書を科学する



電気通信大学 附属図書館

私たちは、この助成によって生まれた「縁」を大切に、  
過去の助成研究からいくつかの研究をピックアップし、  
応募に至るまでの研究基盤や問題意識、その後の発展や課題、  
さらには研究の背景に横たわる社会的意義についてもレポートしてまいります。  
これから応募を検討されている皆さんに、  
当財団が助成してきた幅広い研究分野を知っていただくとともに、  
独自の視点で研究に挑み結果を出すことへの情熱や信念、  
専門家としての誇りなどを感じていただければと思います。

子どもたちと、未来のあいだに

**博報財団**  
HAKUHO FOUNDATION



## これまでの研究紹介

★ 研究代表者の所属・役職は発行当時のものです。

2016.07.01 発行

### vol.1 読み書き障害をかかえた子どもたち — 発達性ディスレクシア

**File No.1** 原 恵子 氏（上智大学 大学院言語科学研究科 准教授）

**File No.2** 奥村 智人 氏（大阪医科大学LDセンター 技術職員、オプトメトリスト）

**File No.3** 三盃 亜美 氏（大阪教育大学 教育学部 特別支援教育講座 講師）

**File No.4** 関 あゆみ 氏（北海道大学大学院 教育学研究院 准教授）

「研究紹介ファイル」バックナンバーは、財団ホームページからもご覧いただけます。

<http://www.hakuhofoundation.or.jp>



## 読書を科学する ―― はじめに

読書をすればことばの力が伸びる ―― 。

多くの人が素朴に信じていることだが、実は日本語においては未だ科学的に証明されていない。

読書とことばの力の関係は、海外、特に英語圏では多くの研究が積み上げられ、

読書量が多い人は語彙力も高い、という関係性は明白なものとされているという。

が、この一見当たり前のように思われることが、国内ではまだ明らかにされておらず、

そのため、教育現場では読書を推進しているものの、具体的な指導方法は定まらない現状があるようだ。

一方、電子辞書や電子書籍が登場し、iPadなどのデジタルツールが次々と教育現場で使われ始め、

小学校では外国語活動が始まった。

そういった変化の中、これからのことばの教育における読書の意義を改めて明らかにし、

効果的な指導方法につなげていくことは大切な研究課題のひとつではないだろうか。

「読書を科学する」 ―― この古くて新しいテーマに取り組んだ2件の研究をご紹介します。



研究代表者

いの はら けい すけ  
猪原 敬介 氏日本学術振興会 特別研究員 PD  
(研究従事機関:電気通信大学 情報理工学研究所  
内海彰研究室)

第7回 研究助成

## 小学校低学年児童における 読書量、語彙力、文章理解力の関係

[助成期間] 2012年4月～2013年3月

### 読書の価値を数値で示し、 言語教育の実践に役立てたい

読書とは一度に大量の単語を入力する行為である——このユニークな視点で日本人児童の読書と言語能力の因果関係に切り込もうとしているのが、猪原さんだ。

読書が人間の知的能力に及ぼす影響については、世界的に多くの教育心理学的研究が行われてきたようだ。特に英語圏で多く報告されてきたのが「読書量」「語彙力」「文章理解力」の間には促進関係があるという知見。しかも最近の研究では、かなり幼い時期から読書は語彙力に影響し、小学校1年生の時の語彙力の差は小学校6年生になっても埋まらず(固定化)、語彙力と文章理解力は互いに高めあう相互促進関係を持つので、幼いころについてしまった言語能力の差はますます拡大されてしまう、というショッキングな報告もあるという。

大学院生当時これらの先行研究に触発された猪原さんだったが、翻って国内を見渡すと、日本人児童の「読書量」「語彙力」「文章理解力」の関係についての研究は非常に乏しく、しかも小学校低学年を対象に読書と言語能力の関係を検討した研究は皆無とっていい状態だった。

にも関わらず、日本では多くの小中学校、高校で「朝の読書」が実施され、読書の効果が様々に主張されている。が、その科学的根拠を示したものはほとんど見当たらない。この現状に猪原さんは問題意識を持った。こういった状況で、現場の教師は児童にどう効果的な読書指導をすればいいのか。そもそも、読書と言語能力を高める効果が本当にあるのか——。

「大学の学部生の頃からずっと文章理解

の研究をしていました。人間はどのように文章を理解するのかという心理学的な基礎研究です。修士、博士と進む中で、基礎研究を教育現場へどう応用していくかを強く考えるようになり、基礎的なテーマを“文章理解”から“言語獲得”や“言語学習”へと移していったのです」。

そして「読書」という切り口に着目した。

「文章を理解するためには言語的な知識が必要ですが、では言語的な知識を人はどう獲得していくのか。人間は言葉の意味をダイレクトに学習するというより、“言葉の使われ方情報”をたくさん学習することで意味を獲得する、という認知心理学的な考え方があり、それを新たな基礎研究テーマとしました。その時に読書というものが特別な行為のように思えたのです。日常生活の中で読書ほど短時間に大量の単語を取り入れる行為はないな、と」。

さらに「小学校の先生方が、読書時間を確保するためにも知見は必要だと後押ししてくださったことも、現場での応用を意識した理由のひとつです」。

読書量が多ければ語彙力や文章理解力が伸びる、この因果関係を科学的に明らかにすることができれば、教育現場での効果的な読書指導が可能になる。基礎研究を応用へ結びつける包括的な観点から、猪原さんは助成研究に取り組んだ。

### 「図書貸出数」は 読書量推定指標になりうるか

助成研究では公立2校、私立1校の協力を得て、小学校1年生から6年生までの児童合計992名を対象に大規模な横断調査を行った。最終目的は「読書量」「語彙力」「文章理解力」の関係を明らかにすることだが、まず猪原さんは「読書量」を測定するのに最も理論的に妥当な方法は何か＝国内で標準となりうる読書量推定指標を模索するところから研究に着手した。その理由は、読書量の測定は容易なことではないにも関わらず、国内外で使用されている測定方法の検討が不十分ではないかと考えたからだ。

そこで、読書量推定指標として考えられる候補7つ——「読書時間」「読書冊数」「生活時間帯調査」「活動選好調査」「再認テスト」「図書貸出数」「日誌法」——を猪原さんなりに評価し、それぞれに利点と欠点がある中で考察した結果、①読書量を正確に把握できるのは「日誌法」(読書するたびに記録する方法)だと思われるが、サンプルを集める事が困難で現実的ではない ②「図書貸出数」は図書を借りるという実際の“行動”を測定している点で、子どもの“記憶”や“報告”など主観を含むほかの指標よりも理論的妥当性が高い と考え、この研究では「図書貸出数」が真の読書量を正確に反映している指標であると仮定した。

しかし「図書貸出数」は学校から入手するのが難しい場合もあり、簡便ではない。そこで「図書貸出数」と、これらの指標の相関関係を分析し、「図書貸出数」の代替となりうる妥当かつ簡便な方法を選定することを第一の目的とした。

実際に調査した指標は「日誌法」を除いた6種類。すべて同じ参加者からデータを

収集した。「再認テスト」は海外の研究ではスタンダードな読書量推定方法として多用されているものだ。「著者名再認テスト」と「タイトル再認テスト」の2種類があり、本の著者やタイトルを羅列した表の中に、実在するもの(ターゲット)と実在しないもの(フィルター)を混在させて提示し、知っているものに○をつけさせるテストである。

が、再認テストの日本語版は無かったため、猪原さんはオリジナルで「タイトル再認テスト」日本語版【参照1】(小学校低学年向け、中学年向け、高学年向けの3種類)を作った。日本で小学生を対象とした「タイトル再認テスト」実施は猪原さんの研究が初めてであり貴重なデータだといえる。同様に、「生活時間帯調査」と「活動選好調査」も日本語版が無かったため、新たに作成した。

そしてこれら前述の6つの「読書量推定指標」と、2つの言語能力指標＝「語彙力」

【参照1】タイトル再認テスト

文章	読書	語彙	文章理解	生活	活動
1 どんぶりももぐら ( )	16 キリンのルルがやってきた ( )				
2 ふたりはともだち ( )	17 とりのせきのますだん ( )				
3 たんぽぽのこうえん ( )	18 はじめてのキャブ ( )				
4 100万回生きたねこ ( )	19 しらひつじとくろひつじ ( )				
5 さとうさんのおすれもの ( )	20 おさるのジョージ ( )				
6 えんどうまめのつる ( )	21 ペペペンタ ( )				
7 ともだちや ( )	22 からすのパンやさん ( )				
8 ぐりとぐら ( )	23 にじいろのさかな ( )				
9 ミズくんとモグワちゃん ( )	24 ママとパパのおみやげ ( )				
10 たこやきのおどり ( )	25 11匹のねこ ( )				
11 かえるのあかちゃん ( )	26 おまゑ うまそうだな ( )				
12 むしたちのうんどうかい ( )	27 おねちゃんのお宝 ( )				
13 ねたんでいなかげさん ( )	28 おはようワトリこけこ ( )				
14 ミンミンゼミくん ( )	29 おい味のぼうけん ( )				
15 しずくのぼうけん ( )	30 おにのはいしゃ ( )				

これから、本の だいたい名が たくさん出てきます。このうち、いくつかはほんとうの 本の だいたい名で、いくつかは にせものの 本の だいたい名です。だいたい名を 読んで、それが あなたの 知っている だいたい名なら、その横の かつこに○をつけてください。

( ) はフィルター。(実際のテストに色づけはしていない。)

「文章理解力」(市販の『Reading-Test 読書力診断検査』を使って調査)の、計8つの指標間の相関関係を分析した。

相関関係とは、読書量が多いと語彙力も高い、というような関係である。

猪原さんは結果をわかりやすく示すため、各指標の関連を視覚的に把握できる「多次元尺度構成法」を使って表した【図1】。指標間の距離が近いほど、関連が強い＝正の相関関係が強いことを意味している。これにより、例えば①語彙力と文章理解力は近い②図書貸出数はどの指標とも一定の距離を取り、際立って近い読書量指標はないことなどが明らかになった。

分析と考察の結果、猪原さんは、少なくとも小学校児童に関しては「図書貸出数」の代替となる簡便な測定方法は存在しないのでは、と結論づけた。

「より正確に言う、読書量推定指標そのものについてももう少し詳細な研究が必要ではないか、という問題提起になったと思います。どの指標も読書量を測定しているのだから、互いに近い距離になるはずですが、そうはなりません。理由は、どの指標が正確に読書量を反映しているかは学年によって異なるからではないか、と考えています。低学年児童に、先週何分読書をしたか回答を求めること自体難しいかもしれませんが、高学年になって分厚い本を読むようになると読んだ冊数が少ないから読書量が少ないと一概には言えない。図書館で借りる以外に買って読むとか雑誌を読む機会が増える、といった要因も考えられます。この点は今後の課題だと思っています」。



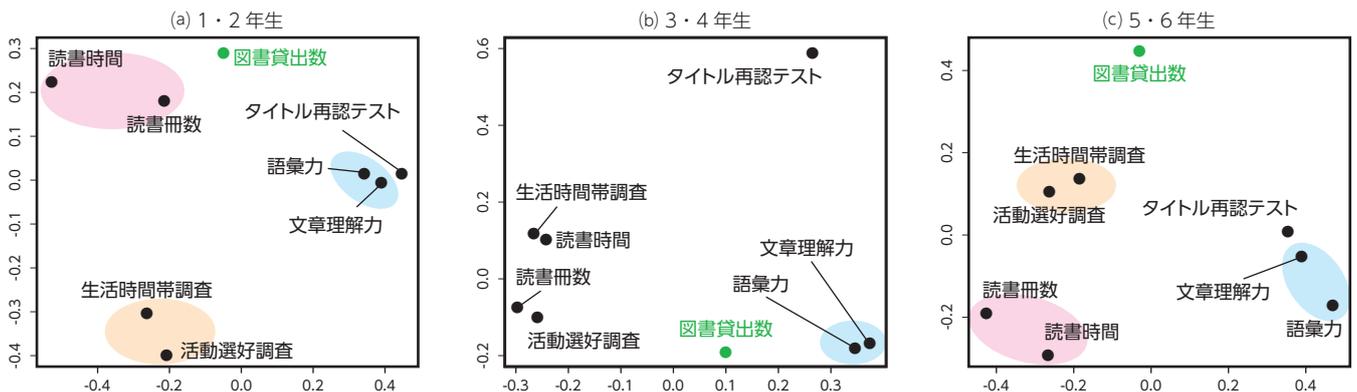
### 学年によって異なるのか？ 読書がもたらす言語的効果

求めていた“妥当”かつ“簡便”の両方を満たす読書量推定指標は見つけられなかった。が、この指標自体の研究が必要である点もふまえた上で、最初の仮定どおり「図書貸出数」をこの研究での「読書量」とする方針をとった。

そして、「図書貸出数」を指標に用いて測定した「読書量」が、「語彙力」と「文章理解力」に及ぼす影響について、それぞれの直接効果と間接効果を分析して検討した。

というのも、「読書量と語彙力の間に正の相関関係があった」からといって、必ずしも「読書量が語彙力に直接影響した」とはいえない。なぜならば【図1】のとおり、語彙力と文章理解力は非常に高い相関関係を持っているので、文章理解力から語彙力に影響した結果(疑似相関)であった可能性を含むからだ。

そこで猪原さんは「媒介分析」でさらに精緻な分析を行い、その結果、小学校低学年のような早い時期から読書量は語彙力の



【図1】読書量指標間の距離



向上に貢献することと、さらに次のような発達段階における関係の変化も明らかにした【図2】。

- ①小学校低学年の時期は、読書量は語彙力を經由して、文章理解力の向上に影響する
- ②中学年の時期は、読書量は、語彙力と文章理解力の両方に直接影響する
- ③高学年の時期は、読書量は文章理解力を經由してのみ、語彙力に影響する
- ④語彙力と文章理解力が互いに強く影響し合うという関係は1年生から6年生まで不変である。

この結果は、学年によって読書の持つ意味が異なることを示唆しており、現場の教師が読書を用いて言語教育をする際の指針にもなりうる。例えば、低学年では文章全体を理解させるより、一つひとつの単語の意味をしっかりと教えていくことが重要だが、高学年では文章そのものをしっかりと理解させることで文章理解力を伸ばし、そ

れがひいては語彙力向上につながる、ということが考えられる。

3要因の関係性を発達段階に応じて分析した研究は国内初、といえるものだったが、しかし助成研究内容を精査して投稿した論文が学術誌『教育心理学研究』に採択された際、猪原さんは、媒介分析による「読書量の効果モデル」部分を取り下げている。

当時と結論が変わった、ということなのだろうか？

### 横断調査から縦断調査へ 読書量⇒言語能力の因果関係に踏みこむ

「そのとき1回りの横断調査で効果モデルの仮説を示せた、と言い切るには、まだデータが弱いと判断したからです」。

猪原さんがこの研究助成に応募したのはドクター3年の秋。実際、研究にとりかかったときは、福井大学医学部で自閉症の評価

に関するプロジェクト研究員として勤務していた。

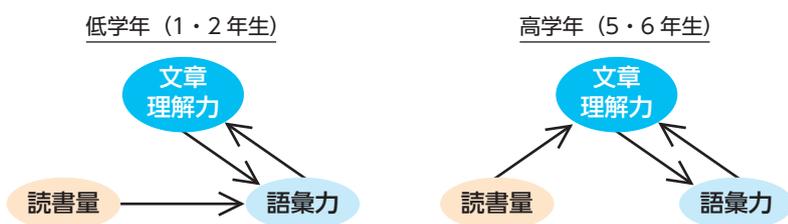
「福井大での2年間で、医学の世界では基礎研究が患者の治療法にかなりダイレクトにつながることを目の当たりにし、やはり応用していかなければ、との思いを新たにしました。読書研究では、読書をしたから言語力の力が伸びたのだという因果関係を実証したい。そうすれば教育現場での読書活動推進は効果があると言えるし、言語能力への影響力をふまえた読書指導も可能になります」。

因果関係に踏み込むため、猪原さんは横断調査で協力を得た1校について引き続き2年間の縦断調査を行い、論文投稿中だという。

「読書は、少なくとも言語能力の一部を伸ばすという因果関係を示す結果が得られています」。

今春からはさらにもう1校、縦断調査を開始した。

「相関関係があるというだけでは、因果関係があることにはなりません。読書⇒語彙力かもしれないし、語彙力⇒読書かもしれない。そういう別解釈を残すデータでは弱いのです。同じ学校の同じ学年を追跡調査する縦断調査で「言語能力の伸び」と「その間の読書量」の関係を調べ、読書⇒言語能力の矢印の方向を示したいです」。



【図2】小学校低学年と高学年で優勢な「読書量の効果モデル」

## 読書は一人で継続できる 自律的な学習方法

猪原さんは現在、電気通信大学の情報理工学研究科に籍を置き、基礎研究としてコンピュータシミュレーションを行っている。読書量が増えるとういうメカニズムで語彙力が伸びるのか、を明らかにするためだ。

「先に、人は“言葉の使われ方情報”をたくさん学習して言語の意味を獲得する、と言いましたが、言語のようにルール化しにくいものを学習するとき、人間は推測を働かせて理解できるようになる＝パターンを学習する、という考え方があります。そのルールをコンピュータプログラムに学習させるには大量の言葉の用例を入力するのですが、それを人間に置き換えた行為が読書ではないかと思っています。メカニズムはかなり複雑で、完全にプログラム化するのは難しいのですが」。

そのコンピュータシミュレーションによる基礎研究をクローズアップしてまとめたのが今春発行した『読書と言語能力 言葉の「用法」がもたらす学習効果』だ。今後は基礎データを積み上げながら、言語能力が弱い子どものために効果的なトレーニングプログラムを開発できるよう、介入研究を行っていききたい、など意欲は尽きない。

「読書は教育において非常にメリットのある方法だと思っています。まずコストが少ない。図書館などを利用するほか、電車の中でも公園のベンチでも本を読める場所は多様にあります。何より一人でできる。しかも、ある程度読めるようになれば一人で継続してできる行為なので、言葉の力だけでなく知的な面や情緒的な面も含め、自律的な学習において有効な手段だと思います」。

だからこそ、読書をすれば言語能力が伸びる、と実証したい。猪原さんの熱意が教育現場に活かされる日が待ちどおしい。



▶『読書と言語能力 言葉の「用法」がもたらす学習効果』(猪原敬介=著 京都大学学術出版会)



## そのジャンルの導入的な1冊に巡りあえれば 読書量が増える弾みになるはず

色々な小学校を見せていただく機会が多いのですが、学校によって図書館の差があまりに大きいことに驚きます。学校の中心に図書館があり図書内容も充実していて、本の置き方で工夫されているような所もあれば、図書館が校舎の端っこの陽も当たらないような場所であって、子どもたちにほとんど利用されていない所もある。僕は学校図書館が好きで、昼休みはよく図書館で本を読んでいたから、学校図書館をどう充実させるかを考える際にも読書の有効性に関する知見が役立ってくれればと思います。

読書量がいちばん多かったのは中高高校時代。あの頃は推理小説を本当にたくさん読みました。学校の勉強はもういいや(笑)みたいな感じでしたね。もちろん友達とも遊びましたし、ゲームもしましたが、それらには無い面白さが読書にはあったのでしょう。

幼いころは親が読み聞かせをしてくれていたようです。自分の記憶がある訳ではないので親の口ぶりとか、家に絵本がいろいろあったとか、からの推測ですが、『三びきのやぎのがらがらど

ん』(ノルウェーの昔話 マーシャ・ブラウン=絵 瀬田貞二=訳 福音館書店)が好きでしたね。小学校の学校図書館では『それいけズッコケ三人組』シリーズをよく読んでいました。これは低学年にはお勧めです。昔の作品ですが内容がしっかりしていて、ミステリーや探偵もののような要素があって面白く読めます。

子どもたちには、ある確立されたジャンルの導入になるような本が薦められるといいなと思います。ミステリー、純文学、青春小説etc.僕は司馬遼太郎の『燃えよ剣』を読んで歴史小説にはまりました。小学校高学年から中学生に歴史小説への導入としてお勧めします。

ある1冊をきっかけに、そのジャンルに興味をわいて、どんどん読みたくなる——その1冊に巡りあった経験は読書量を増やしていく弾みになるはずですよ。



### それいけズッコケ三人組

作/那須正幹 絵/前川かずお  
出版社/ポプラ社



研究代表者

つねみ こうへい  
常深 浩平氏

いわき短期大学 幼児教育科 専任講師

第6回 研究助成

## 児童の「文字通りではない言葉」の理解と視点取得能力の関連

[助成期間] 2011年4月～2012年3月

### 物語を読み解き、楽しむ経験が、 他者の立場にたってものを見る力を育んでくれる

ドキリとするタイトルだ。

日常生活において「文字通りではない言葉」を使ったコミュニケーションはそこかしこで交わされている。いっとき流行った“空気読めない”は「文字通りではない言葉」が理解できていない状況の表現ともいえるのだ。

常深さんは、嘘や皮肉、お世辞、冗談、比喩など、言葉の裏や含みを理解しなければ本当の意味がわかったことにはならないものを「文字通りではない言葉」と大きく括り、それらの理解は社会生活を円滑に営む

上で非常に重要な対人コミュニケーション能力のひとつだと考えている。では、人はいかにして「文字通りではない言葉」を理解するのだろうか。

「共同研究者の田村綾菜さんと二人三脚で行った研究です。僕自身は成人を対象に物語とは何か、人は物語をどう理解していくのかという研究をしていましたが、子どもの物語理解のメカニズムはどうなのかとか、当時自閉症スペクトラム障害のある人はフィクションを読むのが苦手なようだという知見も出ており、だとしたら物語が理

解できないという発達的な問題はなんなのだろうとか、複数の視点から見ていかないと物語読解研究が広がりを見せないなど感じていたところでした。そんな時、田村さんに声をかけてもらったのです」。

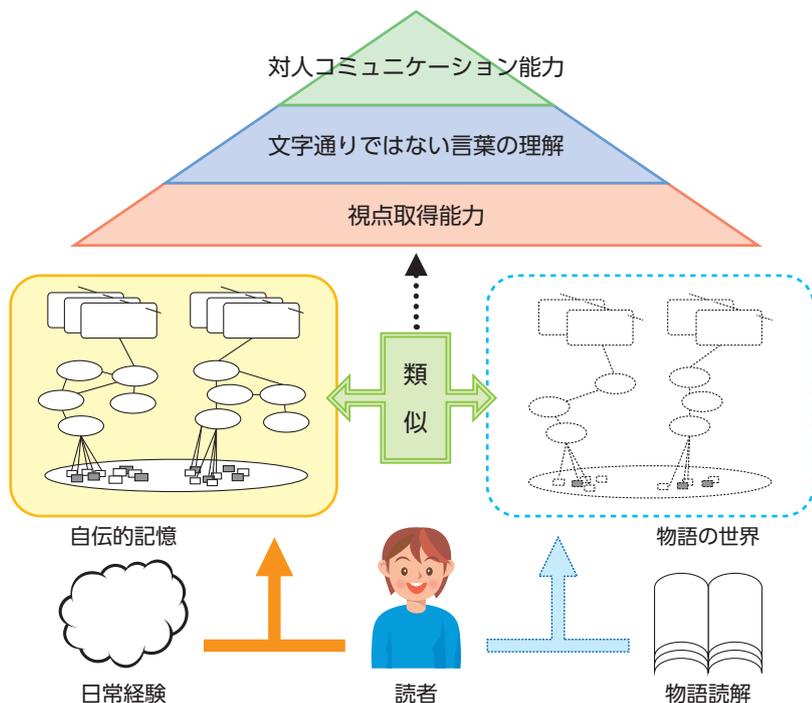
田村さんは研究と合わせて療育の現場で活動しており、高機能自閉症や学習障害を抱える児童が皮肉やお世辞、謙遜といったものの理解が苦手で、そういった児童は対人コミュニケーションも円滑でないという状況を知って、両者の関係に関心を持っていた。

一方、常深さんは、それまでの物語研究の中で、長文物語を読んだときに構築される記憶と、自伝的記憶の構造が類似していることに注目していた。自伝的記憶とはその人が現実世界で体験して得た記憶のこと。構造が似ているのならば、現実では経験していないことも物語を読むことで疑似体験できるのではと考えていた。

また、先行研究によれば対人コミュニケーション能力には「視点取得能力」が深く関係しており、「視点取得能力」と「物語読解経験」にも関連があることが報告されていた。

だとしたら物語を読み、皮肉やお世辞といった場面を疑似体験として積みあげること、視点取得能力の獲得や、「文字通りではない言葉」の理解、ひいてはコミュニケーション能力の向上につなげていけるのでは、と常深さんは考えた。【図1】

そこで、これら3要因の関係を明らかにしたうえで、「文字通りではない言葉」の理解を深められる物語教材の作成と、発達障害児の対人コミュニケーション支援への貢献を見ずして研究を始めた。



【図1】対人コミュニケーション能力の形成に対して物語読解がもたらす作用の仮説的モデル

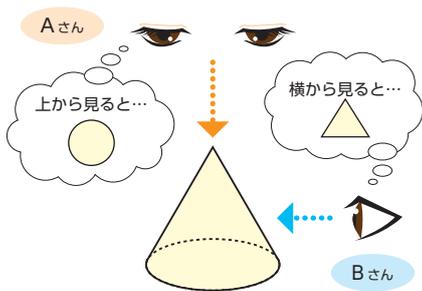
## 他者の立場でものを見る 視点取得能力とは何か？

さて、視点取得能力には次の3つの発達段階がある。①空間的視点取得=実際に動くことで他者の視点を確かめられる【図2】②認知的視点取得=相手の心の中を想像しないと得られない【参照1-どんなきもちだろう？】③社会的視点取得=自分の立場や感情を越え、より一般的、より社会的なルールを含めた中で第三者的に判断できる。

空間的・認知的視点取得能力は、比較的早い時期(幼児期)に得られるといわれ、年齢とともに高度な視点取得能力を獲得していくと考えられている。

一方、「文字通りではない言葉」の理解は幼児期から児童期にかけて発達することがわかっており、成人と同等に理解できるようになるのは小学校5年生程度といわれている。そこで本研究では小学校中～高学年を調査対象とすることとした。しかし、小学校に調査協力を依頼する場合、子どもたちへの負担を考慮し時間的な制約を受けることが多い。限られた機会ですべてに成果を出せるよう、課題精査の意味も含めて、まず大学生を対象に予備調査を行うことにした。皮肉、比喩、お世辞、謙遜の4つの理解と視点取得能力の関係を調査したところ、これら「文字通りではない言葉」の理解には、社会的視点取得能力が関わっている可能性が示唆された。

次に本調査では小学校3～6年生、計392名を対象に「文字通りではない言葉」と視点取得の課題を実施した。さらに読書習慣に関する質問紙調査によって、読書量を物語と物語以外に分けて推定した。その結果、「文字通りではない言葉」の理解と視点取得能力の間に明確な関連は見つからなかったが、物語の読書量と社会的視点取得能力の間には関連が見られた。



【図2】円すいはAさんには丸に、Bさんには三角に見えている。このように自分で物理的に動いて確かめることができる視点。

## 物語読解経験は、 視点取得能力を高める効果があるのか？

これらの検討結果から、「文字通りではない言葉」の理解を含む物語教材を用いることで視点取得能力を育成できる可能性が示唆された、と常深さんは考え、独自に物語教材【参照1】を作成した。さらに、その物語教材を使って、自閉症スペクトラム障害と診断されている3年生男児に介入調査を試みた。介入の方法は、先に協力校で実施したのと同じ「文字通りではない言葉」の課題と視点取得課題に回答してもらい、その後、物語教材を使って視点取得の練習をする。練習後は「文字通りではない言葉」の理解が深まったかを確かめる、というものだ。しかし、このときはお世辞と皮肉は正答だったが、謙遜は練習後も誤答のままだった。

「反省点はたくさんあります。やり始めて気づいたことなのですが、物語教材は1回読むと飽きてしまう、という問題点が大きかった。同じお話を繰り返し読むことは、幼児期を過ぎて小学生以降になると、あまり



しなくなるものです。また、療育の場で活用するには、長いお話だと読むこと自体が大変な場合もあるので、長さも含め、助成終了後も継続して内容を練り直し、質を高めていきました」。

さらにその後もう一度介入調査を行い、「謙遜も含め、文字通りではない言葉を含んだお話を1週間ぐらいの間、ある程度の頻度で読み聞かせをすると視点取得能力が上がっていく、そういうところまでは1本の論文にまとめることができました。大勢

「どんなきもちだろう？」

対象：認知的視点取得が苦手なお子さん 形式：読み聞かせ、音読、黙読

どんな きもちだろう？

ケンヤくんが おうちで ずこうの しゆたいを しています。  
「おかあさん ハサミ どこー？」

おかあさんは だいどころで おりよりの とちゆう  
てが はなせないで  
「テレビの よこの つくえの ひきだしの なかよー」

ケンヤくんが テレビの よこの つくえの ひきだしの なかを さがすと  
「あ！ あった」

だいどころから おかあさんが います  
「つかいおわたたら もとのぼしよに かえしておいてねー」

でも しゆたいが おわるころ ケンヤくんは  
おかあさんに いわれたことを すっかり わすれて  
ほかの どうぐと いっしょに  
ハサミも じぶんの かばんに しまっちゃった

さてさて

つぎのひ おかあさんは ハサミを つかいたく になりました

Q. ハサミは いま どこにあるでしょう？  
テレビの よこの つくえの ひきだし？  
ケンヤくんの かばんの なか？

Q. おかあさんは さいしよに どこを さがすでしょう？  
テレビの よこの つくえの ひきだし？  
ケンヤくんの かばんの なか？



【参照1】常深さんオリジナルの物語教材(一部抜粋)

の人を集めて調査するのが難しいケースなので、少ない人数という制約の中ではありましたが一定の効果が認められるだろうという結論は出せたと思います」。

これら物語教材は、常深さんの母校である京都大学の〈こころの未来研究センター〉の研究プロジェクト「発達障害と読み書き支援」と連携し、発達障害児を対象とした学習支援プログラムに参加する児童にも使用された。

「助成研究をきっかけにセンターに深く関わらせていただいたのですが、その時に得た繋がりが今もしっかりと残っていて、療育支援や療育研究を一緒に続けています。僕が研究的立場から参加させてもらう形で、例えば今までの療育経験をまとめたブックレットを作ろうという活動も始めています」。

### 研究と保育者の育成、 両輪を得た環境で見えてきたもの

その後も、物語教材の効果を検証し、視点取得能力により効果のある教材になるよう改善して、幼稚園・保育所、小学校、それ以上の年齢層での運用を、と考えていた常深さんだったが、大学で教鞭をとるようになって5年目、研究を形にする時間が取

れないという悩みも抱えているようだ。

「ただ、蓄えができてきている気がします。幼稚園や保育所、児童施設といった現場を訪れたり、学生たちと話をしている中で、研究であであったことは現実場面ではこういうことなのかという実感がわいたり、研究ではこう言ったけれども、現場の感覚だと違うかもしれない。じゃあそれはどういうことなんだ、と考える機会があったり。研究と教育現場のバランスが取れ、両輪がしっかりしたと感じています」。

常深さんは現在、乳幼児の保育や教育に関わる仕事を志す学生たちを指導しており、発達心理学や保育内容指導法の中の言葉の領域を教えている。これまで研究で培ってきたものは、授業をとおして学生に伝えられているようだ。

「保育士も幼稚園教諭も共通して、5つの領域を基本的に学ぶことになっています。健康、人間関係、表現、環境、そして言葉の5領域です。僕は言葉の発達について担当させてもらい、別の先生が読み聞かせの方法や紙芝居の技術など現場の実践的な側面を補ってくれています」。

言葉の発達の中では、“言葉を発することの意味”の解説が大切だと感じています。こ

れは言葉を習得する前を例に考えるほうがわかりやすいと思います。保育所には乳児クラスがあるので、0歳児や1歳児を前にして、言葉も話さないし何をしていいかわからない、コミュニケーションがとれないという学生が出てくるのです。そういうときは、言葉とはそもそも意味を乗けて出す乗り物みたいなものだという考え方があって、大事なのは乗り物ではなく乗っている内容のほうなのだという説明をします。これを理解していると言葉というものの理解もまた深まっていくよ、と」。

言葉の意味だけでなく、そこに込められた真意まで含めて意味をとらえることが大切だと、常深さんは学生たちに教えているのだ。

「赤ちゃんは言葉は発しないけれど反応はしている。例えばこちらの動きを目で追って動くときは、その動きが赤ちゃんの言葉なのだと話しています。広い意味でコミュニケーションですね、言葉は使わないけれどコミュニケーション。やがていろいろな細かい内容まで表現できるようになっていくのが言葉を獲得していくということなのだ、と」。





## 物語とは何か ―― ライフテーマとともに歩み続ける

研究と保育者の育成、両輪を得た今の環境で、常深さんは今後どのように読書研究と関わっていこうと考えているのか。

助成研究をきっかけに、子どもの発達と対人コミュニケーション能力という新たな扉が開けた、と言う常深さん。

「今の仕事で保育の現場や施設に行かせてもらう機会を得ましたので、ひとつは療育支援教育ともからめ、この5年間の蓄積を研究として昇華させていきたいですね。具体的には物語教材の検証や改良です。これは近いうちになんとか時間を作りながら取り組んでいきたいと思っています。

もうひとつ、今後は子どもが初めて物語を理解し始める時と、子どもが現実というもののある程度理解し始める時期には関連があるのではないか、ということの研究していければと思います」。

さらに、やはり物語とは何かということをやりたい、と常深さんは言う。

「人はどのように物語を理解するのか、物語の世界と現実の関係を認知心理学的に検討する研究をずっとやってきました。物語の楽しみは疑似体験ができることで、楽しみの根底には自分自身の現実体験＝自伝的記憶がある、というのが僕の考え方です。お話を読んでいる時に、お話の世界がすごく好きになり没頭することがありますよね。僕の研究から言えば、その世界の素晴らしさは自分の記憶から引き出されているはずなんです。つまり現実が素晴らしいんですよ。ですから、物語を通して現実というものがいかに生きていくのに意義のあるところか、ということ発信し続けていければと思いますし、自分の人生を物語として楽しんでもらうためのお手伝いができるようになれば本望かな、と思います」。



## その子がその時に読みたい本、それがお薦めの1冊です

幼児の言葉の発達について教える仕事をしているので、お母さん方に「子どもにはどんな本を読ませたらいいですか？」と質問されることが結構あります。研究者としての回答は「今その子が読みたいと思うものを読むのが一番いい」。これがいいよと薦めるより、なにが好き？と、その子に聞きたくなるのです。もしくは、どんなことが好き？と。場合によっては、今は本を読む時ではないね、と答えることもあるでしょうね。本を読むより外で友達と野球をしている方が楽しい時期もありますから。ただ、人生のどこかで密に本と親しむ時期があって欲しい。

小学生の頃は野球やフットボール三昧で読書とはほぼ無縁の日々でした。ただ、繰り返し読んでいたのは『コンチキ号漂流記』。読書感想文の宿題は毎回コンチキ号で書いていました。忘れられない一節があるんです。正確ではありませんが、大型船でスクリーの音を立てながら海を走っていけば海には何もいなかったということになるだろう。ただ、いかだを浮かべてのんびりプカプカ浮いていると、いろんな生き物が顔を出してくる、といった内容です。ああ、自分はいかだでプカプカのほうが好きだなあと強く思った記

憶があります。いかだの視点に共感したということでしょうね。

読書三昧になるのは高校生になってから。特に『少年期の心』(山中康裕＝著 中公新書 中央公論新社)には影響を受けました。これはいくつかのカウンセリング場面の事例を一般向けの読みものにした興味深い内容で、例えば、学校恐怖症の女の子の治療の過程は赤ずきんちゃんの物語仕立てになっています。大学では心理学を学ぼうと決めたまっかけのひとつですね。

幼いころは絵本が好きでよく読んでいました。大人になっても読み返すのは『てぶくろ』(ウクライナ民話 エウゲーニー・M・ラチョフ＝絵 内田莉莎子＝訳 福音館書店)です。大学の図書館には絵本や紙芝居がたくさんあって、学生たちは授業で、読み聞かせが発達に影響する仕組みを学んでいます。読み聞かせが幼児の言葉の獲得に良い影響があることは、いくつかの先行研究で示されていますから。

子どもたちに対しても、子どもたちを育てる職業に就くかもしれない学生たちに対しても、読書の楽しみや効果を示していく事は必要だと強く思っています。

### コンチキ号漂流記

著／トール・ハイエルダール 訳／神宮 輝夫  
出版社／偕成社





## 当研究助成への応募について

「児童教育実践についての研究助成」は2005年に「博報『ことばと文化・教育』研究助成」としてスタートして以来、多様な研究を助成してきました。これからも、ことばの教育と実践の研究を支援し、教育の質の向上につなげてまいります。皆さまからのご応募をお待ちしております。

### 【対象となる研究】

- 「ことばの教育」に関する研究
  - 国語・日本語教育の諸分野における研究
  - あらゆる学びの場におけることばの教育に関する研究

- 児童教育実践の質を向上させる研究

- 多様な場における教育実践の質を向上させる研究

### 【応募資格】

下記のいずれかに該当する方を対象とします。

- 日本の大学・研究機関に所属する研究者
  - ※若手支援のため、教授やそれに相当する職は除く。
- 日本の学校・教育委員会に所属する教育実践に携わる方

● 詳しくは財団ホームページをご覧ください ●

<http://www.hakuhofoundation.or.jp>

### 【助成金額】

1件につき300万円を限度に助成します。

### 【助成期間】

応募の翌年4月1日～翌々年3月31日の1年間

助成期間終了後、研究(代表)者が希望する場合は、継続助成の申請をすることができます。

※今後の研究計画書と提出された「研究成果報告書」を審査して採否を決定します。



子どもたちと、未来のあいだに

博報財団(正式名称:公益財団法人 博報児童教育振興会)は、

1970年、株式会社博報堂の創業75周年記念事業として設立されました。

新公益法人制度の施行に伴い、2011年4月に公益財団法人として認定され、現在に至ります。

次代を担う子どもたちの豊かな人間性の育成のために、児童教育の実践者を顕彰する「博報賞」をはじめ、

「児童教育実践についての研究助成」「国際日本研究フェローシップ」「世界の子ども日本語ネットワーク推進」など、

「ことば」「文化」の領域を中心に児童教育の支援につながる活動を行っています。

### 公益財団法人 博報児童教育振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂2-11-7 ATT新館8F Tel 03-5570-5008 Fax 03-5570-5016

[www.hakuhofoundation.or.jp](http://www.hakuhofoundation.or.jp)

博報財団

検索

「研究紹介ファイル」は財団ホームページからもご覧いただけます。